

江 尻 地 区 カ ル テ

データについて

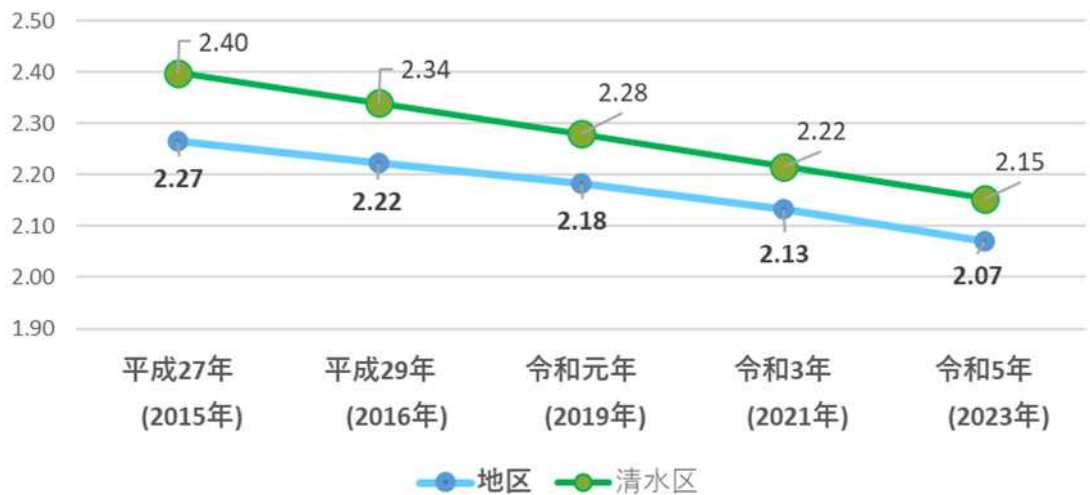
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているため、自治会名と一部異なる場合があります。

江尻地区の人口特性 令和5年3月 8,176人 3,948世帯 2.07人/世帯

●人口・世帯数の推移



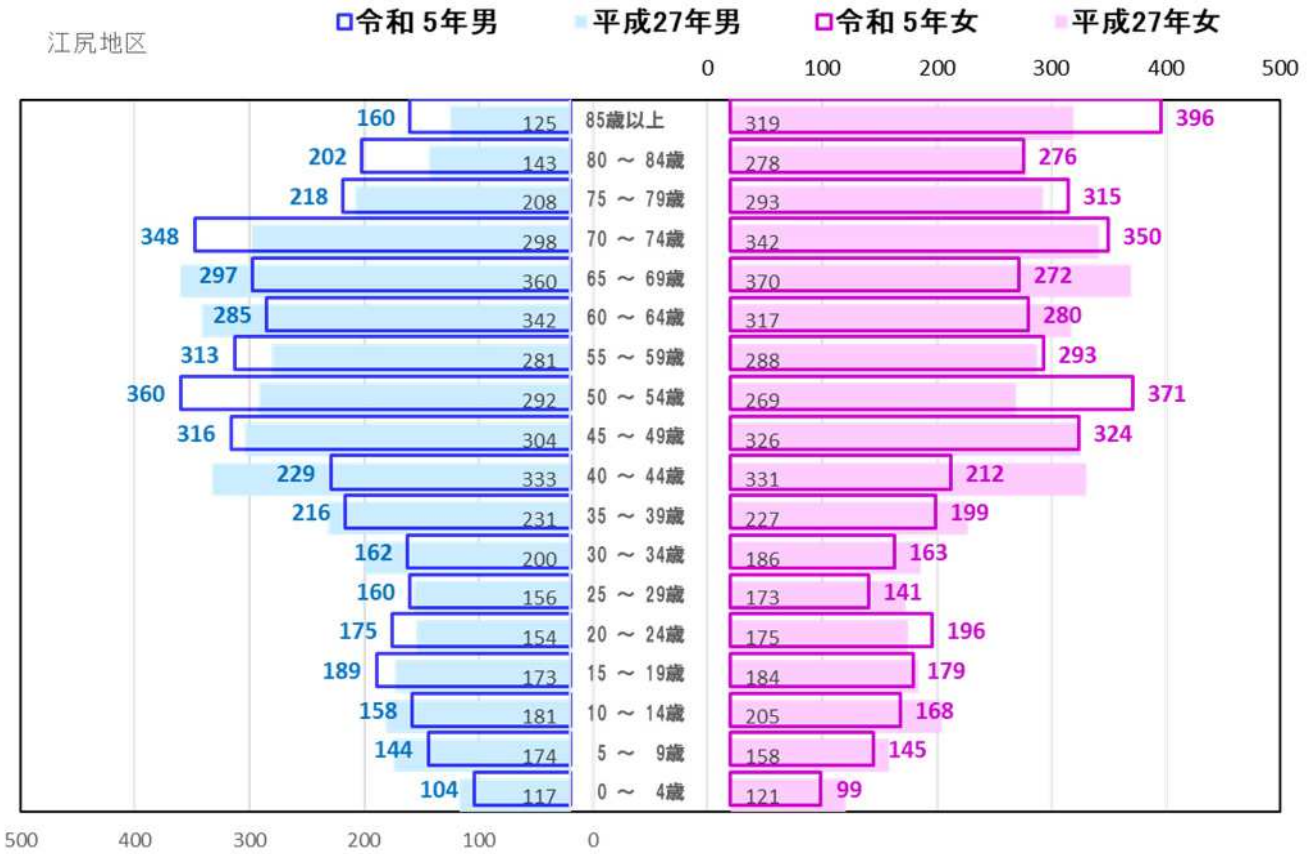
●一世帯当たりの人口推移



●65歳以上の高齢者を支える生産年齢層（15-64歳）

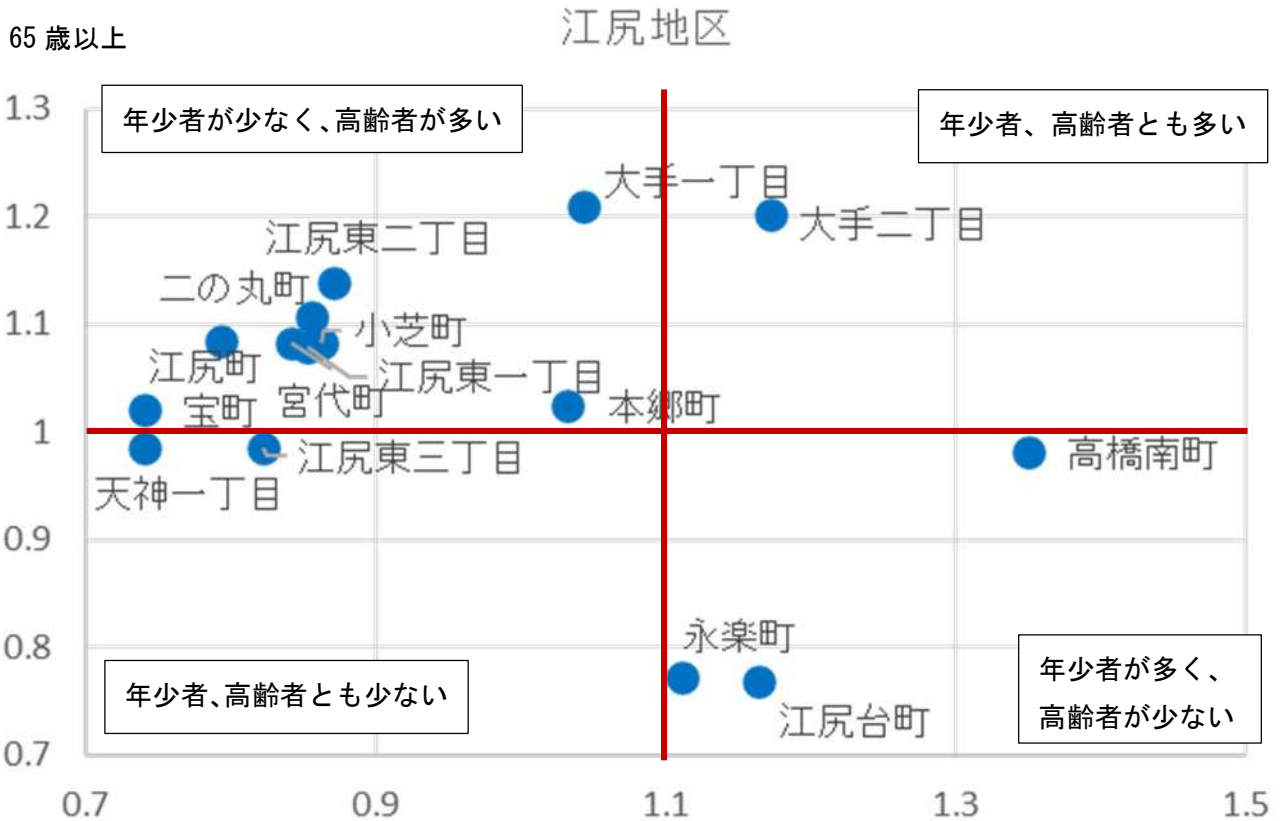
区分	平成27年 (2015年)	令和5年 (2023年)
地区	1.81人	1.70人
静岡市	2.16人	1.88人
清水区	1.98人	1.71人

●人口ピラミッド【平成27年(2015年)と令和5年(2023年)の5歳階級別男女別構成】



●町別の14歳以下と65歳以上の割合分布(清水区の平均値を1とした場合)

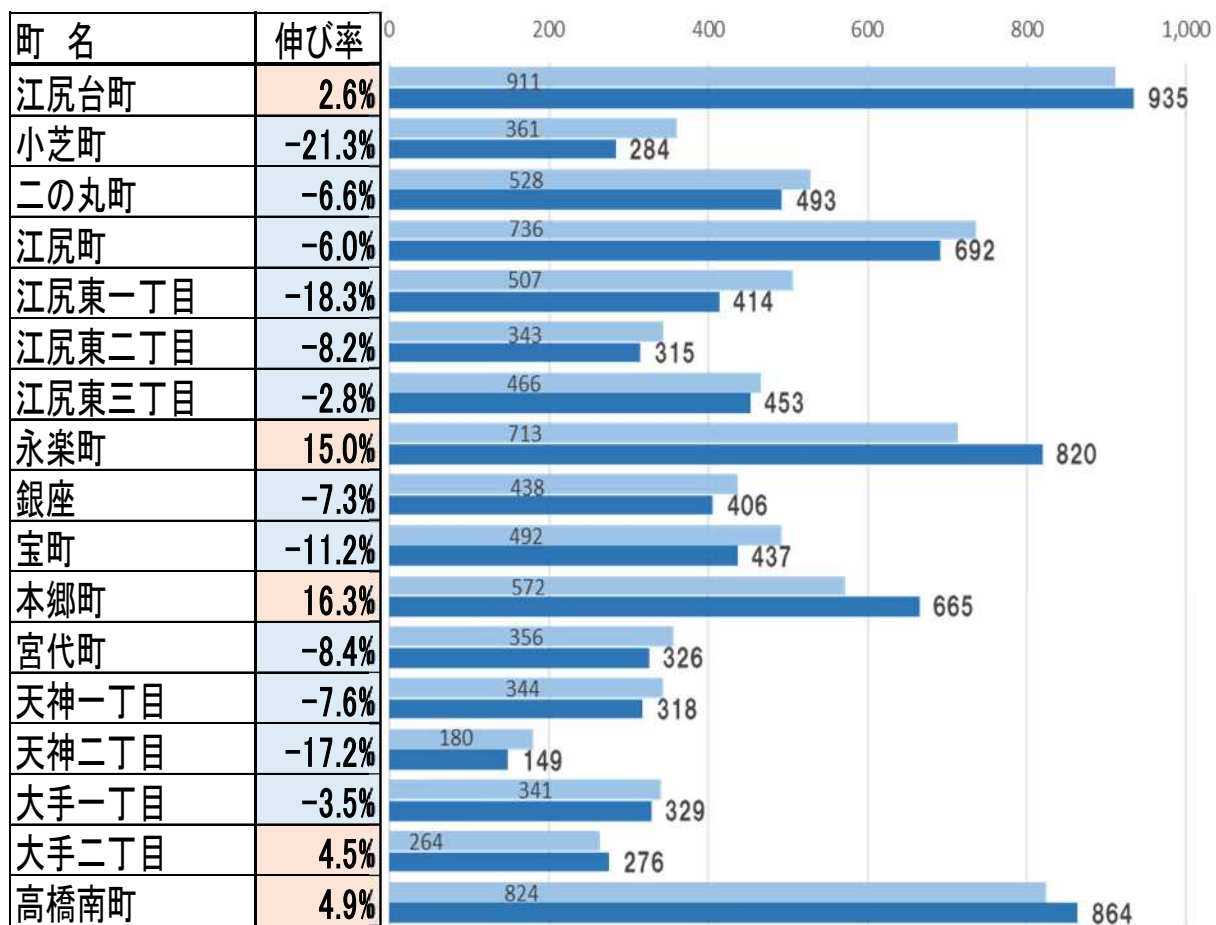
※年少者(14歳以下) 高齢者(65歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成 27 年（2015 年）と令和 5 年（2023 年）の比較】

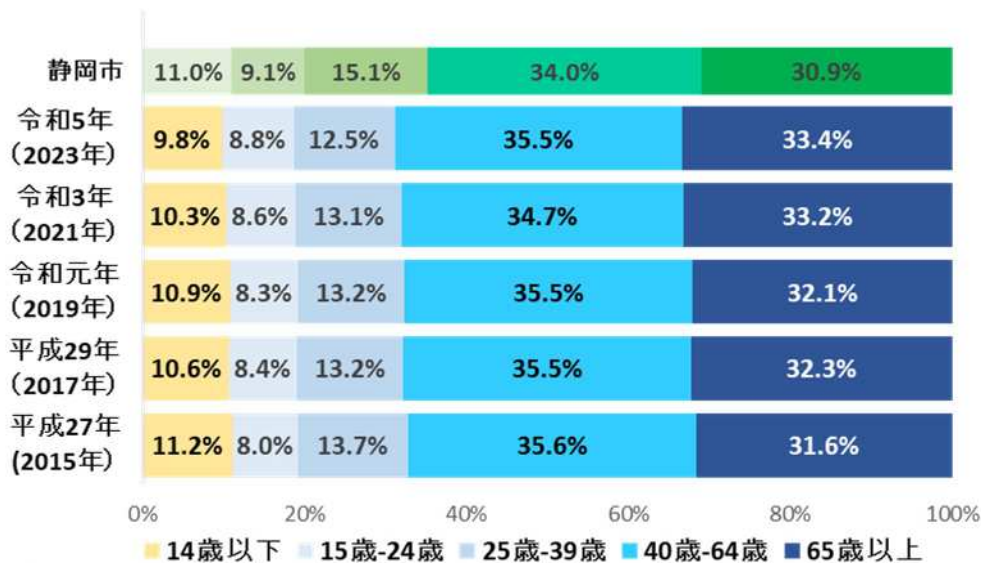
人口推移グラフ（上段平成 27 年 下段令和 5 年）



		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 5 年 (2023 年)
江尻地区	-2.4%	8,376	8,176
静岡市	-4.6%	713,564	680,913

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和5年人口3区分別：

市の割合より

青字 14歳以下の割合が低い場合

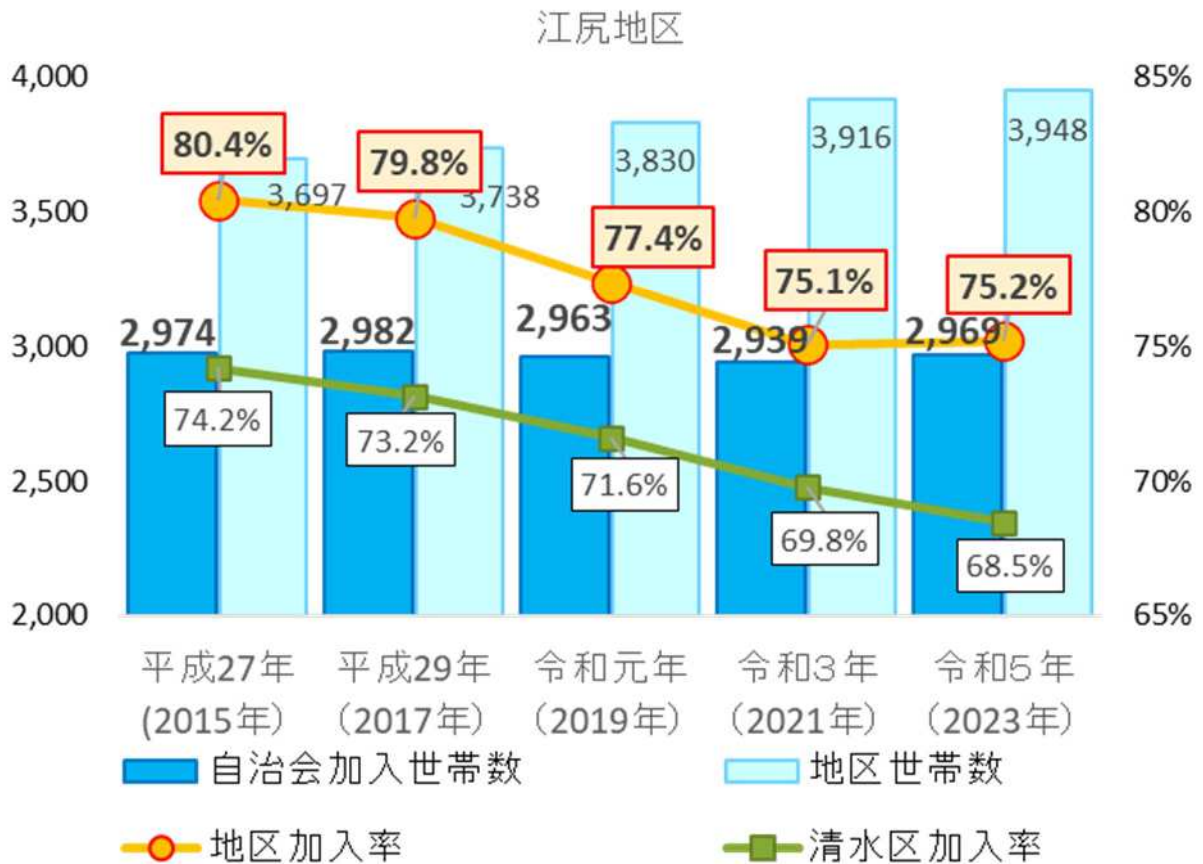
赤字 65歳以上、75歳以上の割合が高い場合

町名	令和5年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
江尻台町	11.9%	25.5%	13.5%
小芝町	8.8%	35.9%	21.1%
二の丸町	8.7%	36.7%	21.7%
江尻町	8.1%	36.0%	19.7%
江尻東一丁目	8.7%	35.7%	22.2%
江尻東二丁目	8.9%	37.8%	22.5%
江尻東三丁目	8.4%	32.7%	18.8%
永楽町	11.3%	25.6%	12.1%
銀座	5.9%	39.9%	22.9%
宝町	7.6%	33.9%	19.0%
本郷町	10.5%	34.0%	19.1%
宮代町	8.6%	35.9%	20.6%
天神一丁目	7.5%	32.7%	15.1%
天神二丁目	6.0%	34.9%	16.1%
大手一丁目	10.6%	40.1%	20.1%
大手二丁目	12.0%	39.9%	21.7%
高橋南町	13.8%	32.5%	18.6%
江尻地区	9.8%	33.4%	18.4%
清水区	10.2%	33.2%	18.7%
静岡市	11.0%	30.9%	17.2%

●自治会加入状況

令和5年

加入率	地区	75.2%	加入世帯数	2,969世帯
	清水区	68.5%	住民基本台帳世帯数	3,948世帯



江尻地区コメント

- ・人口は減少傾向を示し、世帯数は増加傾向にあります。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・人口の減少地区がほとんどですが、平成27年と令和5年の人口比較で15%以上増加している地区(永楽町、本郷町)や微増している地区(江尻台、大手二丁目、高橋南町)も見られます。
- ・令和5年の65歳以上を1人支える生産年齢(14歳から65歳)が市の1.9人より低い1.7人ですが減少傾向にあり、若い世代が地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は市の値69%より高い75%ですが年々減少傾向が見られます。40歳から64歳の自治会活動等で中心的に活躍を期待される層の減少も見られます。

江 尻 地 区

地名のゆかり

「江」というのは、入江と同じ意味で、海や湖水が陸地に深く入り込んだ所を指します。

「入江」の後ろの土地のため、「江尻」という地名が付いたものでしょう。

この地名は、貞応2年（1223）、一人の旅人が「久能寺にもうでた後、有度の浜を通過して江尻の浦を過ぎた」という紀行文を残しているところから、鎌倉時代には既に使われていたものと推定されます。

江尻は、かつて高橋村の浦浜だったと言われ、ある時代には、辻地区の本郷に村落があったと考えられますが、永禄11年（1568）、武田信玄が江尻城（小芝城）を築いてから、城下町として発展しました。

その後、徳川家康の時代に、江尻は東海道五十三次の宿駅とされ、巴川に大橋（現在の稚児橋）が架けられ、辻、横砂へ向かう道も開かれました。



江戸後期の江尻の海（広重）

江 尻 の 宿

清水銀座という名称は、復興のきざしが見え始めた昭和24年に付けられたもので、それまでは、長い間「宿」あるいは「宿通り」と呼ばれていました。これは、清水銀座の通りが、江戸時代に東海道五十三次の「江尻の宿」として栄えたからです。

天下を平定した徳川幕府は、江戸と京都の間を東海道五十三次として、そこに宿（荷物を運ぶための人馬が用意されている、旅人の宿泊地）を置きました。

江尻宿もその一つで、中心部の仲町、魚町、志茂町、伝馬町、入江町は、「宿五町」と呼ばれていました。なかでも、今の清水銀座にあたる仲町、魚町、志茂町には、大名の泊まる本陣、脇本陣をはじめ、庶民の泊まる旅籠屋や、まき代を払って自炊する木賃宿など、旅籠が40～50軒も軒を連ねていました。ここは、参勤交代の大名や、東海道を上り下りする旅人で大変賑わいました。



江戸後期の江尻宿（北斎）

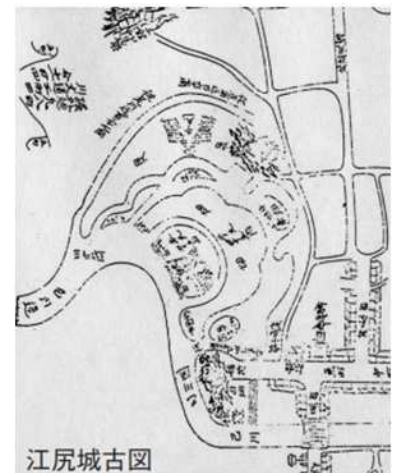
江 尻 城

永禄11年（1568）、駿河に侵入した武田信玄は、翌年、江尻に城を築きました。これは、蛇行する巴川を利用して造られた城で、その本丸は、現在の中部電力発電所付近にあったと推定されます。

この江尻（小芝）城の完成によって、町人の町江尻は城下町となり、職人の町「鍛冶町」、「鋳物師町」が発達しました。

天正6年（1578）、江尻城は、信玄の子勝頼の命によって修築され、天守閣のそびえる城となりました。

この城は、天正10年、城主の穴山梅雪が徳川家康に降服したため、戦わずして徳川氏の手へ帰し、築城後わずか30年後の慶長5年（1600）に廃城となりました。しかし、昔をしのぶものとして、鍛冶町、鋳物師町、大手町、紺屋町などの地名が残されています。



江尻城古図

巴川のかっぱ

慶長16年（1601）、駿府の徳川家康が代官に命じて、巴川に初めて橋を架けさせました。この橋が完成したので、土地の老夫婦を選んで渡りはじめの式を挙げようとしたところ、どこからか一人の子供が現れて、スタスタと橋を渡ったかと思うと、そのまま府中（静岡市）のほうへ歩いて行ってしまいました。これが、巴川に住む「かっぱ」だったのです。人々は、不思議なことがあるものだど驚きながらも、これこそ神の使いだと喜んで、橋の名を稚児橋と付けたということです。



大正時代の稚児橋

灯籠流し

巴川の灯籠流しは、夏の風物誌として、市民に長く親しまれてきました。この行事がいつごろから始められたのか分かりませんが、俳諧裾野集（1848）に「巴水（巴川）、この水の流れ、巴の字形をなすをもって川の名とす。初秋16日の夜は、このほとりなる家々より、水上に灯籠を流して、伊豆国大瀬大明神へ奉る。宵のうちにさざ波に浮びて、さながら花の散り交うごとくなるも、流れ流れて、夜のふけゆくままに、沖の荒浪にやや沈めるなど、生者必滅のことわり見えて、そぞろ悲し。」と、江戸末期の灯籠流しの様子があります。



巴川の灯籠流し（昭和39年）

灯籠流しは、戦争などのため何回か中断され、近くは昭和47年にも、港内に残される灯籠の処理が困難なため、いったん中止されました。しかし、この行事を懐かしんで、その復活を望む声が強いため、昭和51年から稚児橋と大正橋の間で、再び行われるようになりました。盆送りの晩、巴川の川べりは、「家内安全」などと書いた灯籠を手にした浴衣掛けの家族連れで賑わっています。

「江浄寺の恋のものがたり」

江尻は、旧東海道の宿場町で参勤交代の宿場として賑わっていました。その江尻宿に江浄寺という寺があり、徳川家康の長男、岡崎三郎信康の供養塔があります。

今から380年前の寛永元年、徳川家光の時代のことです。九州平戸藩主が参勤交代で国元へ帰る行列を追った藩主の弟源太郎は、無断で江戸屋敷を抜け出し、ようやく江尻宿で追いつきました。しかし、「許婚を守るため」という理由があったにせよ、幕府の掟を破った罪は重く、松浦藩安泰のため25歳の若さで江浄寺で自刃しました。



岡崎三郎の供養塔

時は流れ、平成17年11月、悲恋の史実を語り継ぐため暖かい人達の力により境内に「恋塚」が建てられ、13日の「お十夜法要」で開眼供養が行われました。